肩書き

Junko Higasa

夏目漱石の有名な話といえば「博士号辞退」がある。漱石が若い頃『吾輩は猫である』にあるように「博士になったら娘を嫁にやってもいい」と言われたことがあるという話が残っているが、相当意地っ張りな性格とはいえ、さすがにその問題だけで博士号を辞退したわけではあるまい。しかし社会的地位で人を判断することに対する反発はそのとき生まれたものかもしれない。いや、それどころか彼の心にかなり深く根を張ったに違いない。『猫』の苦沙弥先生≒漱石と考えるなら、東大を出て官僚にならず英語教師になった者を軽んじる世間に対しても反発は増幅しただろう。そういった積重ねの中で有名作家になった漱石に、文部省から「博士号を授与するから出頭せよ」との通知が届いた。当人は胃潰瘍の療養中である。国を思いながらも権力には反発を感じる漱石には「今さら」の感もあったのではないかと想像する。しかしそれよりも作家として思う存分書けるようになった今、「博士号」をくれると言われてもかえって迷惑である。何故なら「博士」になることは世間に縛られ、時に自由発言が抑制されてしまうこともあるからだ。大学講義準備時間が惜しくなるほど創作活動に目覚め、自分の表現力を思う存分発揮したかった漱石は、作家としての人生を貫くために自由な立場でありたかったろう。そしてまた真面目な漱石はその発表の場を与えてくれた朝日新聞に対する義務も遂行したかったろう。物事とは全てタイミングである。運命の歯車はうまく噛みあってこそ回る。必要なものは必要な時に必要な人になければ何の役にも立たない。死後の勲章のようなものである。漱石にとってこのタイミングで博士号を受けることは、作家としての自由が失われることであった。それにも増して同じ研究に名を連ねても代表者だけが栄誉を得るような不平等に対して批判を持っていた漱石は、「博士号」にふさわしい人物全員にそれが行き渡らないことも正義ではないと考えていたかもしれない。さらに漱石が意地を張ったとするならば「博士になって日本の未来の崩壊を促進する歯車になるのはイヤだ」というところではないだろうか。漱石は権力組織の作りつつある間違った社会を修正するために、作品を通して日本の未来の青年に正しい影響を及ぼす道を選んだ。その人間としての生き様は見事であったと言うほかはない。それは意にそぐわないことをやりたくないという気持ちと肩書きに頼らない自信、能力に則した社会的平等を問う正義を含んでいたろう。

ところで現代、少なくとも日本において肩書きは発言権を得るために必要なものである。それが正しく進んでいればよいが、一部においては肩書きが主で本人が従に変化してしまい、肩書きによって世の中が間違った方向へ進む確率は明治時代から悪く増幅してしまったようである。さらに肩書きと仕事が一致すればよいが、日本は肩書きが大きいほど隠居状態である。したがって先進的頭脳は肩書きよりも生き甲斐を選ぶ。あとに残るのは肩書きに安住している輩か、肩書き通り勤めようとする自己犠牲型人間か、労働押し付けられ型人間である。肩書きの持つ意味は一体何であろうか。

「本人が偉いのか、付属物が偉いのか」と問うた漱石における「肩書き」は、真に価値ある功労者に平等に与えられるものではなく、欲の強い世渡り上手が幅を利かせるために手に入れる権力だったかもしれない。真実に肩書きは要らない。(2013.2.21)